

# 告白失敗場面における対人感情と原因帰属に及ぼす期待の効果

豊田弘司

(奈良教育大学 学校教育講座 (教育心理学))

The effects of the expectancy on interpersonal affection and causal attribution in failure of confession of love

Hiroshi TOYOTA

(Department of School Education, Nara University of Education)

**要旨:** 大学生を対象にして、仮想場面法を用いて、異性に対する告白を失敗した場面における感情、原因帰属及び次への意欲を検討した。告白する相手に対するこれまでの関係がうまくいっている場合(期待高条件)と、うまくいっていない場合(期待低条件)を比較した結果、告白を拒否された場合の不快感は期待高条件が期待低条件よりも高かったが、次への意欲も前者が後者より高かった。また、告白を失敗した原因を努力帰属する程度は、期待低条件が高条件よりも高かった。さらに、期待高条件では、男女ともに、魅力不足に失敗原因を帰属することで、次回への意欲が低下することが明らかになった。そして、男子では期待高条件で随伴経験と努力帰属の間に正の相関、女子では期待低条件で随伴経験とタイミング帰属の間に正の相関が見られ、随伴経験と原因帰属の関係における性差が示された。

**キーワード:** 原因帰属 causal attribution  
告白(恋愛) confession of love  
対人感情 interpersonal affection

## 1. はじめに

児童・生徒にとって重要な関心は、学校生活における対人関係である。友人や教師との関係は、学校適応に大きく影響する要因である。思春期には心理的な問題が多く指摘されているが、その原因は自己概念の歪みにある(豊田, 2010)。例えば、不登校には様々なとらえ方があるが、学校場面における自分の否定的なイメージが形成されてしまった結果とみることもできる。暴力行為を繰り返す生徒は、友人や教師からみられる自己概念に否定的な部分が入った結果であるかもしれない。自殺する青年に関しては、将来の展望も含めた健全な自己概念ができていなかった可能性が高いといえよう。このように、思春期以降の青年期においては、健全な自己概念を形成することが最も重要な課題である。

では、どのようにしてこの健全な自己概念を形成するのであろうか。健全な自己概念とは、2つの要素から構成される。第1の要素は、肯定的な自己のイメージである。自分は能力があるというような自己肯定感もしくは自尊心と同じものである。第2の要素は、将来に対する肯定的展望である。これは、将来、自分がどのような進路を進んでいき、そこにどのような生きがいや喜びがあるかという期待である。第1及び第2の要素を形成する重要な要因が、随伴経験である。随伴経験とは、自分の努力が成果を伴う経験である。牧・関口・山田・根建(2003)は、中学生を対象にして、随伴経験尺度を作成し、その随伴経験量と

自己効力感(自分の行動に対する期待)との関係を見いだしている。また、豊田(2006)や豊田・島津(2006)では、大学生においても、随伴経験と自尊感情や自己効力感との関係が見いだされている。これらの研究は、自分の努力が成果を伴う経験をするると自尊感情が高まり、その結果、健全な自己概念が形成される可能性を示唆している。

豊田らの研究(豊田, 2016; 豊田・川崎, 2017, 2018; 豊田・田中, 2018)では、努力と成果が随伴する場面(期待した行動と相手からの行動が一致する場面)と随伴しない場面(一致しない場面)を仮想場面法で設定し、それぞれの場面における感情や原因帰属(causal attribution)の関係を検討した。原因帰属とは、ある事象に対する原因を何かの要因に求めることであり、人間は日常生活での事象に対して何らかの原因を想定し、想定された原因によってその後の活動が異なる。Weiner, Heckhausen, Meyer, & Cook(1972)は、原因となる要因(原因帰属要因)として、能力、努力、課題の困難度及び運を想定した。これらの要因は、Rotter(1966)によって提唱された統制の位置(locus of control)次元によって内的統制要因(能力、努力)と外的統制要因(課題の困難度、運)に分けられ、安定性の次元によって安定要因(能力、課題の困難度)と不安定要因(努力、運)に区分されている。その後、Weiner(1979)は、統制の位置及び安定性の次元に統制可能性の次元(統制可能-統制不可能)を加えた枠組みも提唱している(豊田・川崎, 2019)。豊田らの研究では、努力と成果の随伴性が動機づけに影響し、随伴している場合が随伴しない場合よりも動機づけが高いということが明らかに

された。ただし、随伴しない場面（努力をしたのに、失敗した場面）における努力帰属と次への意欲の関係が見いだされ、次への意欲が低下しないのは、努力帰属によることが明らかにされた。すなわち、自分は能力が低いのではなく、努力が足りないと思うことによって自尊感情や自己肯定感の低下を抑制したのである。また、健全な自己概念の第2の要素である将来に対する肯定的展望に関しても、努力帰属することによって、「次はうまく行くかもしれない」という期待が生まれ、それが努力することへの意欲を喚起し、そこでの成果が随伴経験となり、さらなる動機づけへと導くことになる。このような経験が将来における肯定的な展望を生み出すのである。

原因帰属に関しては学業場面での検討が多いが、対人関係における随伴経験の重要性を考慮すると、対人関係場面における原因帰属の重要性は高い。豊田（2012）は、仮想場面法を用いて対人関係場面における感情と原因帰属の関係を検討した。そこでは友好的行動、援助的行動が、自分に要求される場合と他人に要求される場合を比較した。その結果、相手に対する感情は相手の性（同性、異性）及び好意（非好意）への帰属の程度によって規定され、好意（非好意）への帰属は偶然への帰属と負の相関のあることが示されている。豊田・田中（2018）は、このような対人場面において相手との関係が感情や帰属に及ぼす効果を検討した。その結果、相手から肯定的な発言がなされた場合には、相手の印象が良い場合が悪い場合よりも快な感情が喚起されるが、相手から否定的な発言がなされた場合には、相手の印象が悪い場合が良い場合よりも不快な感情の喚起が緩和されることが示されている。また、相手から肯定的な発言がなされると、相手の印象が良い場合には相手が異性よりも同性に対する好意帰属が大きいが、相手の印象が悪い場合にはこの両者に差はなかった。さらに、相手の印象が良い場合には相手の発言が肯定的な発言の場合は好意帰属、否定的な発言の場合は非好意帰属を行うが、それぞれの好意及び非好意帰属の程度は同じくらいであった。一方、相手の印象が悪い場合には、肯定的な発言に対しては好意帰属の程度が小さくなり、否定的な発言に対しては非好意帰属の程度が大きくなることを示された。豊田・田中（2018）では、相手との関係を操作するために、相手に対する印象（良い、悪い）及び相手からの発言内容（肯定、否定）を用いたが、相手に対する印象から予期される発言と相手からの発言の一致・不一致によって、感情や原因帰属が影響されたことを示したのともいえる。すなわち、あらかじめ予期していた行動（普段の行動）と実際の行動とが一致しない場合は、感情や原因帰属が大きく影響されるということである。これと同じく、豊田・川崎（2019）は、相手の行動が予想された行動と一致する場面と一致しない場面を比較したことによる。このように、予想された行動や結果と実際の行動や結果が一致するかどうかは重要な要因であるといえよう。特に、一致しない場合に感情や原因帰属が大きく影響される。豊田・川崎（2019）では、

予期しない良い結果の場面と予期しない悪い結果場面を設定して、感情や原因帰属の関係を検討した。

本研究では、異性との対人関係場面を仮想場面として設定し、予想した結果が実際の結果と一致する可能性が高い場面（期待高場面）と、一致する可能性が低い場面（期待低場面）を設けた。具体的には、異性に対する告白場面を設け、期待高場面は相手との対人的交流がうまくいっている（楽しい会話がある）場面であり、期待低場面はその対人的交流がうまくいっていない（楽しい会話がない）場面を設定した。そして、これらの2つの場面において、感情（「交際をことわられた時の快-不快評定値」）、原因帰属（「これまでの努力が足りなかったから」という理由にあてはまる程度の評定値）及び次回への意欲（「次回に会った場合に、こちらから声をかける」にあてはまる程度の評定値）の関係を検討する。期待高場面が低場面よりも不快感情が高く、努力帰属がより強くなり、次回への意欲が高くなると予想した。この予想を検討するのが、本研究の第1の目的である。

豊田・川崎（2019）では、対人場面での感情や原因帰属には個人差が大きく影響すると考え、個人差変数として随伴経験量による違いを検討している。その結果、女性の参加者においてのみではあるが、随伴経験量が多いほど、予期した行動と一致しない場面においてその原因を自分の特性に帰属せず、偶然に帰属し、次への意欲の高いことが明らかになったのである。本研究においても随伴経験量や非随伴経験量と原因帰属や次回への意欲の関係を検討する。そして、それらの関係が期待の高低によって変化するか否かを検討するのが、本研究の第2の目的である。

## 2. 方法

### 2.1. 調査対象

調査対象者は2018年~2019年に第1著者の授業を受講した大学生であり、調査終了後、この調査の目的、調査用紙の提出はこの授業の成績には関連しないこと、個人が特定できるデータとして利用しないことを説明し、承諾してくれた者から調査用紙を回収した。その結果、2回の授業にわたる調査のための1回でも欠席した者は除き、250名（男子99、女子151）の回答を分析データとした。

### 2.2. 調査材料

**仮想場面調査用紙** 先行研究（豊田, 2012, 2016; 豊田・川崎, 2017, 2019; 豊田・田中, 2018）と同じく、仮想場面を含む調査用紙を作成した。この調査用紙は、異性に対する告白場面において、相手との交流がうまくいっていたにも関わらず、告白に失敗した場面（期待高場面）、及び相手との交流がうまくいっておらず、告白にも失敗した場面（期待低場面）を設けた。そして、それぞれの場面において、その場面での感情（不快-快）、告白が失敗した原因に対する帰属（魅力帰属、タイミング帰属、タイプ帰属



Table 1 場面ごとの感情、帰属及び対人意欲度評定値の平均と、随伴及び非随伴経験量との相関係数 (r)

性		高						低					
		感情	魅力 帰属	タイミン グ 帰属	タイプ 帰属	努力 帰属	次回へ の意欲	感情	魅力 帰属	タイミン グ 帰属	タイプ 帰属	努力 帰属	次回へ の意欲
男性 (n=99)	M	2.08	5.26	3.65	5.38	3.83	3.39	2.78	4.98	4.94	5.47	2.69	
	SD	0.90	0.88	1.68	0.72	1.63	1.38	1.03	1.35	1.19	0.98	1.29	
	感情との相関 (r)	—	-.12	.07	-.19	.07	.31**	—	-.11	-.04	-.11	.20*	
	魅力帰属との相関 (r)	—	—	-.05	.44**	.24*	-.22*	—	.03	.55**	.08	-.08	
	タイミン グ 帰属との相関 (r)	—	—	—	.06	.32**	-.04	—	—	.26*	.46**	-.15	
	タイプ 帰属との相関 (r)	—	—	—	—	.17	-.09	—	.06	—	.14	-.09	
	努力 帰属との相関 (r)	—	—	—	—	—	.01	—	—	-.04	—	.03	
	対人意欲との相関 (r)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	随伴経験(M45.81 SD 5.84)	.02	.02	.17	-.00	.20*	.05	-.01	.10	.01	.07	.09	
	非随伴経験量(M28.61 SD 7.52)	-.18	.00	.09	-.08	.11	-.06	-.02	-.14	-.07	.05	.01	
女性 (n=151)	M	2.11	4.88	3.21	5.28	3.30	3.49	2.89	4.63	4.79	5.38	2.75	
	SD	0.83	1.14	1.45	0.94	1.35	1.24	0.71	1.52	1.24	1.03	1.15	
	感情との相関 (r)	—	-.12	-.05	-.12	-.07	.24**	—	.07	-.24**	.05	.22*	
	魅力帰属との相関 (r)	—	—	.03	.25**	.18	-.27**	—	.07	.70***	.14	-.35**	
	タイミン グ 帰属との相関 (r)	—	—	—	-.17	.28**	.06	—	—	-.01	.41**	.01	
	タイプ 帰属との相関 (r)	—	—	—	—	.01	-.07	—	—	—	.05	-.21**	
	努力 帰属との相関 (r)	—	—	—	—	—	-.05	—	—	—	—	-.00	
	対人意欲との相関 (r)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	随伴経験(M48.50 SD 7.19)	-.14	.08	.10	-.00	.06	.06	.10	.25**	-.00	.13	.08	
	との相関係数 (r)	.01	.02	-.01	.03	.05	-.02	-.01	.14	.00	.02	.02	

\*p<.10 \*\*p<.05 \*\*\*p<.01

験尺度に関しては、次週の授業において約5分で実施し、随伴経験の意味を説明した。両調査ともに個人名が特定されるデータとして扱われないこと、受講している授業成績との関連がないこと及び提出は任意であることが説明された。そして、承諾を得た者のみから調査用紙を回収した。

### 3. 結果と考察

Table1には、場面ごとの感情(不快-快)、各原因帰属度及び対人意欲における平均評定値とSDが示されている。

#### 3. 1. 感情評定値(快-不快)

感情評定値について2(参加者の性;男子、女子)×2(期待;高、低)の分散分析を行った。その結果、期待の主効果( $F_{(1,248)}=149.58, p<.001$ )が有意であり、期待高場面が低場面よりも感情評定値の低いことが示された。言い換えれば、期待高場面での不快感情が高いということである。性の主効果( $F_{(1,248)}=.63$ )及び性×期待の交互作用( $F_{(1,248)}=.49$ )は有意でなかった。本研究の第1の目的に含まれる予想は、期待高場面が低場面よりも不快感情が高いという予想であったが、予想通り、期待高場面の方が期待低場面での不快感情よりも強いことが明らかになったのである。

#### 3. 2. 魅力帰属度評定値

魅力帰属度評定値について、2(参加者の性;男子、女子)×2(期待;高、低)の分散分析を行った。その結果、性の主効果( $F_{(1,248)}=9.19, p<.01$ )が有意であり、男子が女子よりも魅力帰属が高かった。また、期待の主効果( $F_{(1,248)}=13.83, p<.001$ )も有意であり、期待高場面が期待低場面よりも魅力帰属をする傾向の高いことが示された。なお、性×期待の交互作用( $F_{(1,248)}=.00$ )は有意でなかった。

#### 3. 3. タイミング帰属評定値

タイミング帰属評定値について、2(参加者の性;男子、女子)×2(期待;高、低)の分散分析を行った。その結果、性の主効果( $F_{(1,248)}=6.27, p<.05$ )が有意であり、男子が女子よりもタイミングが悪かったと帰属する傾向の低いことが示された。また、期待の主効果( $F_{(1,248)}=141.89, p<.001$ )が有意であり、期待の低い場面が、期待の高い場面よりもタイミングが悪かったと帰属する傾向が高かった。しかし、性×期待の交互作用( $F_{(1,248)}=.13$ )は有意でなかった。

#### 3. 4. タイプ帰属評定値

タイプ帰属評定値について、2(参加者の性;男子、女子)×2(期待;高、低)の分散分析を行った。その結果、性の主効果( $F_{(1,248)}=1.31$ )及び性×期待の交互作用(

$F_{(1,248)}=.10$ )は有意でなかったが、期待の主効果( $F_{(1,248)}=32.66, p<.001$ )が有意であり、期待が高い場面の方が、低い場面よりもタイプではなかったという帰属をする傾向が高かった。

#### 3. 5. 努力帰属評定値

努力帰属評定値について、2(参加者の性;男子、女子)×2(期待;高、低)の分散分析を行った。その結果、性の主効果( $F_{(1,248)}=5.81, p<.05$ )が有意であり、男子が女子よりも努力帰属が高かった。また、期待の主効果( $F_{(1,248)}=339.17, p<.001$ )が有意であり、期待の低い場面が期待の高い場面よりも努力不足に帰属する傾向が高かった。さらに、性×期待の交互作用( $F_{(1,248)}=4.46, p<.05$ )が有意であった。単純主効果検定を行った結果、期待が低い場面では性の単純主効果は有意ではなく( $F_{(1,496)}=.35$ )、男女に努力帰属の差はないが、期待が高い場面では性の単純主効果が有意であり( $F_{(1,496)}=10.24, p<.01$ )、男子が女子よりも努力帰属する傾向が高かったのである。本研究の第1の目的における努力帰属に関する予想では、期待高場面が低場面よりも努力帰属がより強くなるというものであった。しかし、予想とは一致せず、期待が低い場面の方が期待の高い場面よりも努力不足に帰属する傾向が高いことが明らかにされたのである。これは、期待が高い場面では相手に対する努力は十分にされたという認識があることを反映しており、努力不足ではなく、その他の帰属要因である魅力、タイミング及びタイプ帰属をする傾向の高いことがうかがえる。

#### 3. 6. 次回への意欲評定値

次回への意欲評定値について、2(参加者の性;男子、女子)×2(期待;高、低)の分散分析を行った。その結果、期待の主効果( $F_{(1,298)}=76.78, p<.001$ )が有意であり、期待が高い場面は、期待が低い場面よりも次回への意欲評定値の高いことが示された。豊田・川崎(2019)では、これまでの関係が良い相手であっても予期しない相手の行動によって悪い結果になった場面では相手への働きかけの意欲が低下することが示されている。本研究の場合は期待が高く、告白が失敗した場面では次への意欲も低下するであろうが、期待が低い場合に比べては次への意欲が持続されることが示唆されたのである。なお、性の主効果( $F_{(1,248)}=.32$ )及び性×期待の交互作用( $F_{(1,248)}=.04$ )は有意でなかった。本研究の第1の目的における次回への意欲に関する予想は、期待高場面が低場面よりも次回への意欲が高くなるというものであったが、予想と一致して期待高場面が低場面よりも次回の相手への働きかけ意欲が高いことが明らかになったのである。

#### 3. 7. 感情、帰属及び次回への意欲間の相関( $r$ )

本研究の第1の目的は、期待高場面が低場面よりも告白に失敗した際の不快感情が高く、努力帰属がより強くなり、

次回への意欲が高くなると予想した。Table 1をみると、感情評定値と次回への意欲との相関は男女、期待の高低にかかわらず、いずれも有意な正の相関が得られている。この結果は、豊田・川崎 (2019) と同じく、失敗場面における感情が次回への意欲に反映されることを示唆するものである。ただし、努力帰属が対人意欲に関係すると予想したが、努力帰属と次回への意欲の間には正の相関は認められなかった。したがって、努力帰属によって次回への意欲が規定されるという予想は支持されない。努力帰属に対して、魅力帰属と対人意欲の間には、期待が高い場合には、男女ともにいずれも有意な負の相関が得られている。したがって、期待が高い場合には自分の魅力不足に帰属する傾向が高まり、それが次回への意欲を低下させることが示されたといえよう。豊田・川崎 (2017, 2019) では好意帰属によって次回への意欲の高まることが示されたが、仮想場面の違いによって次回への意欲に影響する帰属要因に違いのあることが明らかにされたのである。ただし、興味深いのは、期待が低い場合では男子は魅力帰属と次回への意欲の間の相関が有意でないが ( $r=-.08$ )、女子では有意な負の相関 ( $r=-.35$ ) が得られている。男子では期待が低い場合には魅力不足に原因帰属することと次回への意欲との関連はないが、女子は魅力帰属することによって次への意欲を失う傾向が強いということがわかる。

また、帰属要因間の関連性ではタイミング帰属と努力帰属の間に男女、期待の高低によらず、正の相関が得られている。上記の分散分析の結果が示すように、タイミング帰属評定値は期待の高低による違いがあり、期待が高い場合よりも低い場合にタイミング帰属評定値の高いことが示されている。努力帰属評定値においても同じ結果が得られているので、タイミングも努力も共通して、期待の高低によって帰属要因となるか否かが決まるといえよう。

### 3. 8. 随伴及び非随伴経験と各評定値間の相関 ( $r$ )

本研究の第2の目的は、随伴経験量や非随伴経験量と原因帰属や対人意欲の関係が期待の高低によって変化するか否かを検討することであった。豊田・川崎 (2019) は、女子の参加者においてのみではあるが、随伴経験量が多いほど、予期した行動と一致しない場面においてその原因を自分の特性に帰属せず、偶然に帰属し、次回への意欲の高いことを明らかにした。本研究では偶然帰属を測定していないが、タイミング帰属が類似した帰属であり、随伴経験量との関係が予想された。Table 1に示されているように随伴及び非随伴経験量ともに帰属との有意な相関がほとんど得られていない。ただし、女子の参加者において期待が低い場面において随伴経験量とタイミング帰属との間に有意な正の相関係数が認められた ( $r=.25$ )。三宅 (2000) は、悪い結果を自分に関連する要因に帰属しないことによって次の機会に対する期待が低下しないことを抑制するという自己保護的帰属パターンのあることを指摘している。本研究において女子に随伴経験量が多いとタイミング

帰属する傾向の高まることが示されたのは、この自己保護的帰属パターンが随伴経験量によって規定される可能性をうかがわせるものである。豊田・川崎 (2019) でも、女子の参加者においてのみ随伴経験量が偶然帰属と関連することが示されている。したがって、女子の参加者にとっては失敗場面において偶然やタイミングにその原因を帰属する自己保護的帰属パターンが随伴経験量によって規定される可能性が高いといえよう。ただし、本研究の結果では、タイミング帰属と次回への意欲の間に正の相関が得られていない。豊田・川崎 (2019) ではその正の相関が得られているので、自己保護的な帰属パターンが次回への意欲の抑制を防御したという解釈ができたが、本研究ではタイミング帰属と次回への意欲の間の関係を明示することはできなかったのである。このような微妙な結果の違いがあるが、何故、女子において上述したような関係が認められ、男子では認められないのかは定かでない。豊田・川崎 (2019) においても指摘されているように、今後の検討課題である。また、性差以外の要因が反映されている可能性もある。例えば、Silver, Mitchell & Gist (1995) は、自己効力感が高いと自己保護的帰属パターンが多くなることを示している (三宅, 2000)。自己効力感は随伴経験量によって規定されるので (牧ら, 2003; 豊田, 2006)、Silverら (1995) が示すように自己効力感が反映された結果である可能性もある。また、随伴経験の多い大学生は自尊感情が高いので (豊田, 2006)、その高い自尊感情を維持するための方略として悪い結果を偶然やタイミングに帰属しているとも考えられる (豊田・川崎, 2019)。

一方、非随伴経験量に関しては、男女ともに期待の高低にかかわらず、各帰属評定値及び対人意欲評定値との相関は有意でなかった。この結果は、豊田・川崎 (2019) と一致する結果である。したがって、非随伴経験量が帰属や対人意欲を直接的に抑制することはないと考えられる。しかし、豊田 (2014) では、随伴経験得点と非随伴経験得点の差を実随伴経験得点として算出し、随伴経験得点よりも自尊感情との間で高い相関を得ている。実随伴経験得点は個人が随伴性を認識できている割合を反映する得点である。随伴経験や非随伴経験の絶対的な量よりもこの両者の相対的な関係が結果に影響している可能性は今後検討しなくてはならない課題である。

## 4. 教育的意義

本研究で得られて主な結果は、告白がうまく行く可能性が高いと想定できる期待が高い場面で告白が失敗する場面が、期待の低い場面で失敗するよりも不快な感情が喚起され、魅力不足に原因を求めて、次への意欲が低下するという結果であった。期待が高いと、失敗した場合にはかなりの感情的なダメージが喚起されることになる。このことは、児童・生徒の指導上留意すべき点である。本研究で扱った対人場面だけでなく、個々の児童・生徒が学校におけ

る定期試験、クラブ活動等においてどのくらいの期待（思い入れ）があるかを教師は認識することが必要であろう。期待の高い活動における失敗に対しては迅速に適切な対応をする必要がある。

また、本研究で扱った魅力不足に対する帰属は能力不足に対する帰属と類似しており、いずれも時間的に安定して変化しづらいものである（Weiner, 1979）。それ故、これらの要因に帰属するとあきらめの感覚が生じ、次への意欲が低下することになる。Dweck (1975) が提唱した再帰属法は、学習性無力感に陥っている児童に対して訓練を行い、能力帰属を努力帰属に変えていく方法である。本研究で扱ったのは対人関係における告白場面であるが、もし、そこでの失敗を時間的に変化しづらい自分の魅力に帰属してしまうと、学習性無力感の児童と同じように、相手に対する行動がすべて意味のないものとして認識されてしまう。その結果、相手に対する行動が起こせなくなる可能性が高い。これは告白という特殊な行動場面に限定されることなく、児童・生徒が日頃直面する対人場面においてもあてはまるものである。したがって、対人関係においては自分が相手から好かれるか否かを自分の魅力に帰属する傾向を抑制しなければならない。そのためには、魅力不足へ帰属するのではなく、努力不足へ帰属させる必要がある。しかし、本研究の結果が示すように、期待が高い場合で努力は十分であったという認識があり、それが魅力不足の帰属へのつながっていると考えられる。そこで注目したのはタイミング帰属である。努力帰属とタイミング帰属の間には有意な正の相関が見られている。期待が高い場面では「努力が足りなかったから」と「告白するタイミングが悪かったから」という項目に対する評定値の平均は3点台である。ということは、努力が足りなかったという風に思えないし、タイミングが悪かったとも思えないということである。しかし、努力が時間的に継続を要するものに対して、タイミングは時間的な継続はない。したがって、魅力不足帰属から努力不足帰属へ移行させる移行措置として、タイミングが悪いという時間的に継続しない要因に原因を帰属させるという方法が考えられる。言い換えれば、相手との関係を構築する全体的な努力に原因を求めのではなく、その努力の中の一部（タイミング）へ焦点をあてる方法である。対人関係を円滑に進めるための努力といっても、児童・生徒にはイメージしづらいものであるが、相手に行動を起こすタイミングという一点にしばればイメージしやすくなる可能性は高い。

また、これまで再帰属法における能力帰属から努力帰属へ移行においては、児童・生徒の努力と結果の随伴性に注目してきた。例えば、自分で工夫して考えたら（努力）、問題が解けた（結果）という関係である。しかし、この努力と結果の随伴性は、対人関係の活動や学習活動の中に多く含まれる。したがって、努力の中身を細分化して一つひとつ随伴性を認識させていく必要がある。言い換えれば、再帰属法においても完全習得学習における目標細目表を

設定し、スモールステップで再帰属の目標を達成するというものである。

最後に、男子においては認められなかったが、女子においては期待が低い場合に、自分の魅力不足であると帰属すると次回への意欲が低下する傾向が示された。このような帰属の性差の原因は明らかではない。現職の教師は性差を経験的に熟知しているが、児童・生徒に対する原因帰属の指導においても性差を意識する必要があるといえよう。

#### 4. 引用文献

- Dweck, C. S. (1975), The role of expectations and attributions in the alleviation of learned helplessness. *Journal of Personality and Social Psychology*, **31**, 674-685.
- 牧 郁子・関口由香・山田幸恵・根建金男 (2003), 主観的随伴経験が中学生の無気力感に及ぼす影響 教育心理学研究, **51**, 298-307.
- 三宅幹子 (2000), 特性的自己効力感とネガティブな出来事に対する原因帰属および対処行動 性格心理学研究, **9**, 1-10.
- Rotter, J. B. (1966), Generalized expectancies for internal vs. external control of reinforcement. *Psychological Monographs*, **80**, 1-28.
- Silver, W. S., Mitchell, T. R., & Gist, M. E. (1995), Responses to successful and unsuccessful performance: The modeling effect of self-efficacy on the relationship between performance and attributions. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, **62**, 286-299. (三宅, 2000 による).
- 豊田弘司 (2006), 大学生の自尊感情と自己効力感に及ぼす随伴・非随伴経験の効果 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, **15**, 7-10.
- 豊田弘司 (2010), 自己概念の歪みと不適応 渡部雅之・豊田弘司 教育心理学 I : 発達と学習 サイエンス社. pp.218-219.
- 豊田弘司 (2012), 対人距離が他者の行動に対する原因帰属と感情に及ぼす効果 奈良教育大学紀要, **61**, 27-33.
- 豊田弘司 (2014), 随伴経験, 統制の位置及び自尊感情の関係 奈良教育大学教育実践開発研究センター研究紀要, **23**, 7-12.
- 豊田弘司 (2016), 努力と結果の随伴性、感情及び動機づけの関係 奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要, **2**, 19-25.
- 豊田弘司・川崎弥生 (2017), 努力と成果の随伴性による原因帰属が動機づけに及ぼす効果 奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要, **3**, 23-30.
- 豊田弘司・川崎弥生 (2019), 相手の普段と異なる行動が対人感情と原因帰属に及ぼす効果 奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要, **5**, 1-7.
- 豊田弘司・島津美野 (2006), 主観的随伴経験と情動知能が感情に及ぼす影響 奈良教育大学紀要, **55**, 27-

34.

豊田弘司・田中俊行（2018），相手の印象と発言が対人感情と原因帰属に及ぼす効果 奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要, **4**, 27-33.

Weiner, B. (1979), A theory of motivation for some classroom experiences. *Journal of Educational*

*Psychology*, **71**, 3-25.

Weiner, B., Heckhausen, H., Meyer, W. H., & Cook, R. E. (1972), Causal ascription and achievement behavior: A conceptual analysis of effort and reanalysis of locus of control. *Journal of Personality and Social Psychology*, **21**, 239-300.